

寺内町の形態再考

水田 義一

はじめに

中世末より近世初頭にかけて、寺内町と称される町が畿内を中心に建設された。寺内町は中心に浄土真宗の寺院を置き、周囲を格子状の計画的な道路によって町割りを施され、町の外郭は濠・土塁等によって防御の備えとするとともに方形に区切られている。そして、蓮如上人以降の浄土真宗門徒によって各地に町が建設されたのである。⁽¹⁾計画的な町割りによって建設された点が、社寺への参詣者を対象に発達した旅籠・みやげ店から構成される門前町との違いである。寺内町の研究に先鞭をつけた牧野信之助は、寺内町とは浄土真宗を中興した蓮如が、本願寺教団を保守するために建設したものであり、寺域を中心に街区を設定し、周囲を土居で囲ったものとした。寺内町の形態も、吉崎御坊―山科本願寺―石山本願寺と発展を遂げてゆくが、その源流は中世の豪族屋敷に範を取っている。そして寺内町の敷地は、寺院の所有地として、戦国大名より自治権を与えられたため、寺院は住民の保護に力を入れて、住民門徒の結束が強まったと述べた。⁽²⁾

寺内町に関する形態的特色、その発生についての牧野説は現在で

も定説となり、寺内町の基本的考え方となっている。戦後に入って藤岡謙二郎は、日本の封建都市の発達史上において、寺内町を近世城下町に先行する計画都市として位置づけた。⁽³⁾すなわち、二度の戦乱によって、石山本願寺が亡びた天正八（一五八〇）年より三年前に、最初の計画的な近世城下町と伝えられる安土城が建設されている。寺内町は城下町と異なって、身分的・職業的統制はみられないが、方格状の町割りが施行され、そこでは商業を中心とした都市的活動が活発に行なわれている。それは、摂津の堺・平野郷の自由都市と同様の都市計画・機能をもっている。中世末の町の形態は、畿内の農村にみられる環濠集落に起源をもつものとした。そして、寺内町に侍屋敷・城郭を付与して近世城下町の形態が完成すると思われる。

両者は、寺内町の形態及び機能に関して一致した見解を述べながら、その源流に関して豪族屋敷・環濠集落と相反するものを考えている。その原因は、次節で整理する如く各地に建設された寺内町の起源について、牧野信之助は蓮如が在世中に作られた初期のものを考察したのに対し、藤岡謙二郎は現在迄明確に地割を残している大和今井・摂津久宝寺等を考察するという対象の違いがある。牧野の対象とした寺内町に残存しているものは土塁・濠のみで方格状の町割りは認められず、最初の寺内町の定義からは外れてしまふ。一方藤岡の対象とした寺内町の形態は完全なものと言えるが、発生を考察するには、成立時期が曖昧である。

寺内町は多様な性格の町が存在することが意識されて、藤田修は福屋益一郎の論文に示唆をえて、町の成立の主導権をもつ三つの

類型を考えた。すなわち(1)寺院側の完全なイニシアティブによって行なわれる場合(石山・山科など)、(2)有力土豪・大名の寄進・門徒化によるもの(今井・城端など)、(3)門徒集団による買得ならびに一定地域の占拠(貝塚・富田林など)である。とくに第3類型では町は商人の自治組織によって維持され、在郷町と言うべき段階に達していることを、富田林を例に実証した。⁽⁴⁾

寺内町は初期から末期迄、多様な建設要因をもち、常に豪族屋敷あるいは環濠集落と近世城下町との接点をなすと一面的に捉えられない事を示したものである。ただし脇田の論点は、寺内町を取り上げるのが主眼でなく、畿内において商人が幕藩体制下でいかに町を建設し維持していったかに重点が置かれていた。

中部よし子は、各地に建設された寺内町を網羅して、脇田の類型に従って整理した後、第1類型の寺内町は北陸に分布し、第2第3の類型の寺内町はその分布が畿内に限定されることを指摘し、地理的配置にも注意する必要がある⁽⁵⁾。

日本の都市発達を広く研究した西川幸治は、寺内町を近世城下町プランの源流として重視し多くの頁を割いている。ここで寺内町とは、真宗という宗教的連帯感によって作られた精神共同体の生活を維持するために計画的に構築された環濠城砦都市と定義し、発達過程のうえから4期に分類している。すなわち(1)堅田の農民と商人・手工業者によって宗教的連帯感が作られた寺内町以前、(2)吉崎における門徒・農民からなる多屋衆によって、御坊を中心に臨戦的城砦都市としての機能が備わった原寺内町、(3)山科・石山において寺内町としての形態と機能が備わる。すなわち山科は豪族屋敷の形態よ

り発展して、三重の土居・濠に囲まれた城砦都市となり、郭内には農民・商人・手工業者からなる町が建設されて、町としての構成も整う。(4)最後は寺内町の解体と変容期。典型的な環濠・計画都市としての基盤目状の町割が整った時は、近世の幕藩体制下で、在郷町あるいは城下町の一部に組み込まれ、寺院を中心とした精神共同体は消失している。⁽⁶⁾

西川の言う精神共同体の成立期には、独特の集落は認められず、寺内町の形態が完成する時期には、精神共同体は解体している。脇田・中部による3類型との関連をみると、第1類型は西川の第2期第3期にあたり、第2及び第3類型が、西川の第4期に該当する。西川の第1期は、脇田・中部では寺内町としての形態を採らなかつたため考慮されていない。

寺内町の研究史を振り返ると、真宗寺院を中心とした城砦都市の機能と、町人の活動が顕著で自由都市的性格(在郷町へ変質)を持った都市があり、百数十年の発展の中で多様な性格と形態を持ったことが明きらかにされていることが知られる。これ以上付け加える事はほとんどないように思える。しかし、寺内町の性格を大きく変えたと思われる石山本願寺は、大阪城の敷地となって寺内町の痕跡は全く失なわれ、各地の寺内町も建設時期の不明なものが多い。

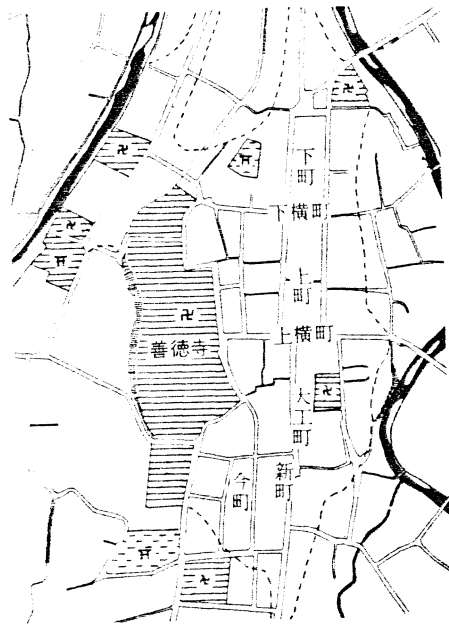
そこで本稿では、文献的に寺内町と称されて、現在も寺内町特有の町割の存在している地区を網羅し、文献的に、その成立時期を明らかにする。第二に各々の町割りも、現在の大縮尺の地図によって明らかにし、寺内町の範囲を推測し、その規格より類型を求め、しかる後に、寺内町と呼ばれる形態を再定義し、それに先行した豪

族屋敷・環壕集落および寺内町の都市計画を吸収したと言われる城下町との関連について考察したい。

一、寺内町の建設

中世末期より建設された寺内町が、どこに、いつ建設されたか、既往の研究に従って述べる。記載の順序は、北陸より順次、南の寺内町と述べる。北陸に古く建設された寺内町が存在し、畿内の南へ行くにつれ、新しい寺内町が依然にも多い。

△越中井波▽ 明徳四（一三九三）年本願寺五代純如の来住によって寺坊が富なまれ、文明七（一四七五）年吉崎にいた蓮如もこの地で布教を行なった。佐々成政によって兵火にあうまで二〇〇年間、寺内町は発展して町家は三千余戸に達したと伝える。従って現在みる井波は、佐々氏時代に再建されたものであろう。山麓の願泉寺門



第1図 城館（都市計画図による）

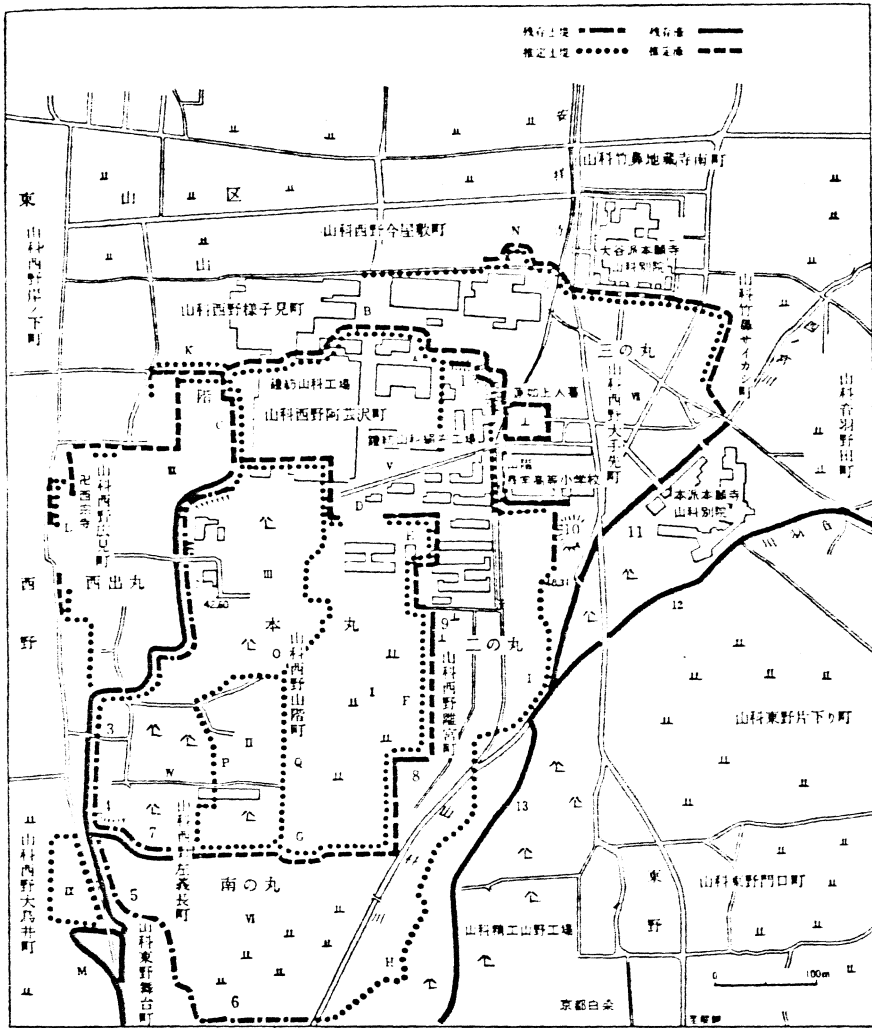
前より、三方向の道路によって町が伸びている。正面の八日町の直線状に二〇〇メートル伸びるが、横町も発達していない。⁽⁸⁾

△越中城端▽ 地方豪族荒木氏の居住地であったが、城下の規模を拡大するため、天正元（一五七三）年福光にあった善徳寺を招請して、城端に移転し、寺内町としたと伝える。⁽⁹⁾ 井波と同様礪波平面を臨む段丘面上にあって、地形を利用して要害の地としている。近世中期の絵図によれば、鎖線の範囲まで拡大しているが、善徳寺の門前に方格状の町割が認められる。

元祿六年の文書によって、城端町へ集住した町人の定住期を知ることが出来る。一五八三年迄に六五軒が来住し、各一〇年間に三〇軒余づつ増加し、一六四五年以降急増している。慶長九（一六〇四）年に下町へ新しく市が立てられ、次第に大町・新町へと拡大して、最も古い上町が次第に衰微している。町割りからも上町・下町が最初に計画され、近世初期以降下横町以南の町が拡大して行ったと思われる。

△越中古府▽ 蓮如が吉崎に在住した時期に、越中国府跡に真宗寺院が建設された。のちに周辺の安養寺村へ移転され、天正一二年に佐々成政の了解のもとに旧寺城への移転が許され、勝興寺が復興し寺内は治外法権を認められ、市場が栄えた。現在、勝興寺は寺院の敷地は濠で囲まれているが、正面への参道が、門前町として直線状に伸びるのみで、門徒の家屋を含んだ寺内町の構成は認められな

い。⁽⁵⁾
△越前吉崎▽ 堅田より逃れた蓮如が北陸布教の拠点として選



第2図 山科本願寺遺構現況図(井口による)

低い丘陵の上に本願寺を築き、その麓に多家衆と呼ばれる僧侶・門徒の家屋が百〜二百戸余り構築された。そして南北に通じる馬場大路を設け、その両端に大門を建てて治安に備えている。

御坊一多屋の立体的配置は、当時の戦国大名の城郭一根小屋集落から構成される初期城下町との類似を示している。吉崎は運如退去後再び農村と化し、そこには本願寺跡を残すのみで、馬場大路をはじめとする寺内町の町割りを残していない。

△近江山田▽草津川の河口に近い北山田に、近江の真宗門徒組織の中心となった永久坊の寺坊が存在していた。天正一一(一五八三)年に南北四町余、東西五町余の荒蕪地が寺地として寄進された。この地に、他宗派の農民を含めた門徒が集まり、開発に当たったが、寺内町としてのプランは作られなかったが、この地に真宗寺院の支配制度を示す「山田寺置目」が残されたので、著名であ

る。

△山城山科▽ 蓮如が北陸の布教に成功して、再び畿内に帰って布教する拠点として選ばれ、文明一〇(一四七八)年より五年余りの年月をかけて、山科盆地の中央に宏大な寺内町が建設された。三重の土塁と壕に囲まれ方八町と称されている。山科に関する古地図をもとに、現在の地形・遺構と対比して、山科本願寺の範囲を復元した井口尚輔氏の論文によれば、第2図のような規模で作られた。

(イ)中央に本学・諸殿を置き、(ロ)中間に坊官宅・寺務所(内寺内)を置き、(ハ)外側に百姓寺内・寺内八町を配置した。2図では(イ)が本丸、(ロ)の丸、(ハ)の丸・南の丸に比定されている。

山科は天文元(一五三二)年に、日蓮宗徒たちによって、滅されて灰燼に帰し、その跡はほとんど残らず、内部の町割りは全く失われていた。しかし、その土塁・壕に囲まれた形態は平地に築かれた城館の形態と類似している。まさに中心となる領主が、真宗寺院にとって代わったのみである。

△摂津富田▽ 蓮如が布教した後、八男蓮芸を住職として教行寺を建設し、次第に町を拡張して行ったと考えられる。天文元(一五三二)年に周辺の武士に焼かれ、天文五年に再興されている。高山右近によって、樂市樂座と公事免許が許され、富田東岡宿と呼ばれている。永祿一二(一五六九)年の耶蘇会通信によれば一向宗のトンダジナイと称する地に着きたり。坊主の僧院なるが、同所にては短日内に生命を消耗する一種の疫病のため千余人死したるを以て、我等は僧院外の旅館に宿泊せりとあって、かなり規模の大きな寺内町の存在が知られる。⁰⁶

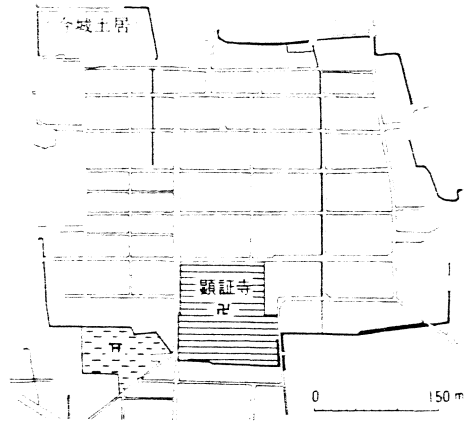
富田は淀川を臨む段丘末端に立地し、西国街道の支道である高槻街道に沿い、教行寺、本照寺などの寺院が配置されているが、方格状の町割りを施行された地域は認められない。

△摂津石山▽ 明応五(一四九六)年蓮如によって坊舎が建設され、山科が焼滅されたのち、本願寺は石山へ移転した。移転前に、石山本願寺は、総石垣・扉御門を有し、寺内町の内部に町の都市施設として、番屋・やぐら・橋・堀・町口の木戸を有していた。寺内六町あるいは一〇町と呼ばれ、山科と類似した城塞都市と考えられる。本願寺は寺内町の年貢地子収納権を有し、寺内町の経済活動への保護も行ない、領主的性格を有していた。

淀川河口という交通的位置にも秀れていた石山本願寺は、織田信長に対抗して元亀元(一五四〇)年より戦いを開始する。全国的な動員によって、長く対抗関係は続くが、天正八(一五八〇)年信長に屈して、本願寺を明け渡し、天満へ移る。以降、本願寺は領主的性格を捨て、寺内町の性格も変容することとなる。⁰⁷

石山本願寺の跡は現在の本丸跡あるいはその南の法円坂と伝えられるが、秀吉の大坂城建設によって、周辺は大きく変容し、痕跡は全く消失し、その形態は復元が困難である。

△河内久宝寺▽ 文明七(一四七五)年以前に、一向宗道場として慈眼寺が存在していたが、蓮如による布教の後、明応年間に西証寺が建立された。天文元年、六角氏によって、大津の近松御坊願証寺が消失したので、その住持蓮淳を迎え、西証寺は願証寺と号することとなった。この寺内町建設にあたって、畠山氏の被官安井氏の協力を得たことから、町の支配は安井氏にゆだねられた。久宝寺に

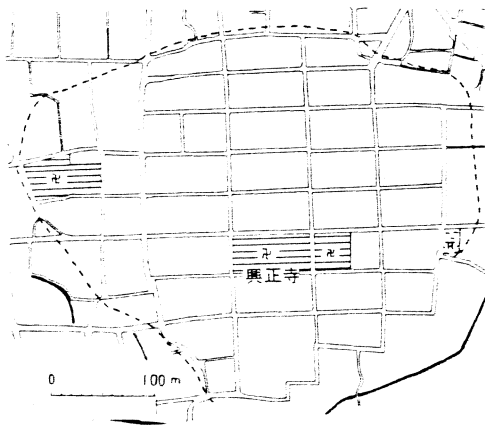


第3図 久宝寺（大阪市都市計画図による）

は安井氏の居城があることから、寺内町の建設によって、城下の繁栄を計ったと考えられている。安井氏は後に織田信長に仕え、石山戦争に際して、本願寺光佐の来攻によって、城が陥ちたと伝えられている。

久宝寺は顯証寺を南に置き、内部の道路は方格状に整然と区画されている。北西隅に突出した金城土居は安井氏の居館址と伝える。ほぼ方形に区画された周囲は、江戸時代の古図によれば濠によって囲まれ、現在も一部が水路として残存している。方形の周濠と、碁盤目状の道路が、天文元年前後に建設された場合には、最も古い寺内町の町割りと言えらるが、天正五年の石山戦争の後の建設であるか確証は不十分。

→河内富田林（大阪元（一五五八）年興正寺一四世証秀上人が、



第4図 富田林（大阪府都市計画図による）

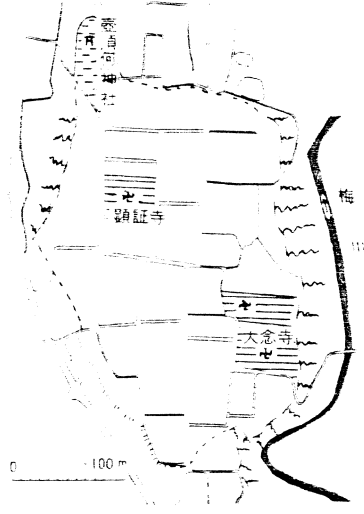
領主三好氏より、山田芝と称する四町四方の荒蕪地を銭百貫文で買得し、そこに興正寺別院を建設した。その際、付近の四七村の庄屋八人が諸公事を免除されて開発にあたった。むしろ、実際は農民が主体となって建設し、名目的に真宗寺院を招いたと言われている。近世初頭には、町内には多数の商人・手工業者が居住して、周辺を中心都市として発達している。

町は図にみる如く、興正寺を中心において、整然とした方格状の道路によって区画されている。寛永二年の町絵図の町割と一致し、町への入口には木戸門が置かれていたことが知られる。町の形はやや楕円に近い形をなし、周囲は石川へ面する段丘崖、空堀によって防衛的配慮をなしている。図を詳細にみれば道路の交差点に一〇二

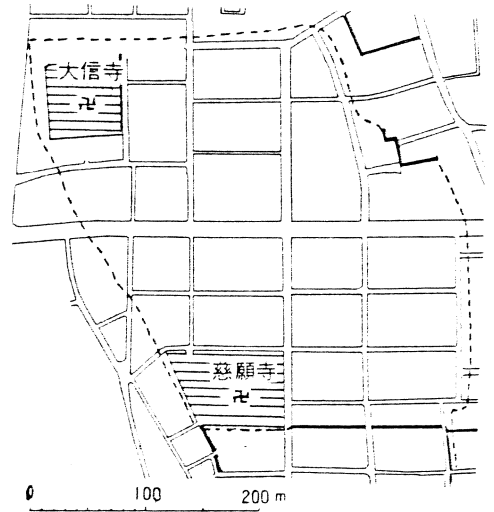
メートルのくい違いの生じた箇所があり、これを要衝二に環濠異姿の影響と述べている。

△河内大穴塚▽ 石川を挟んで富田林の対岸にある。根来衆の居城となっていたが、信長の根来衆追討の結果、永祿一一（一五六八）年根来衆は退却した。その時、村の有力者達によって、大穴塚を寺内とすることに決め、顕証寺証淳を招いて、善念寺を建立した。大穴塚はその寺内として、南組・北組に分かれ、交互に市を開いたと伝える。

大穴塚は石川谷と梅川に挟まれた段丘面にあつて、地形的に要害の地となつてゐる。顕証寺と名称を変えた善念寺の一面に僅か乍ら方格状の道路割が認められる。その南にも、類似した区画があり、顕証寺の周囲が乾丁・東の丁と呼ばれ、大念寺の西は市場・南の丁と呼ばれて、北組・南組がくい違いの生じた東西の通りであることが認められる。



第5図 大久保（河内町都市計画図による）



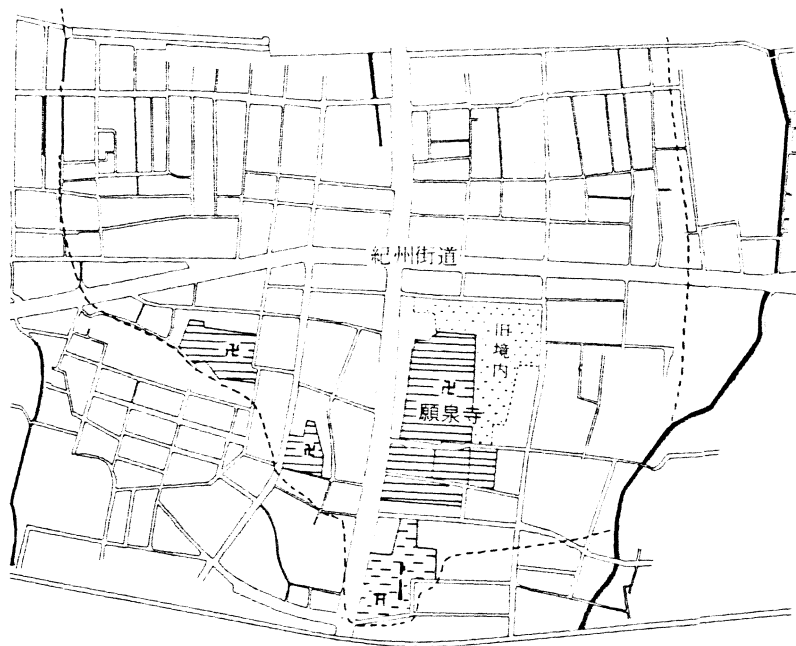
第6図 八尾（大阪府都市計画図による）

△河内八尾▽ 慶長一一（一六〇六）年、顕証寺の下代として久宝寺町を支配していた安井氏に反対して、一七名の百姓が徳川家康に訴え、長瀬川の対岸の荒蕪地への移住を認められた。そして、東本願寺別院・大信寺を中心に八尾寺内町を形成した。同時に本願寺が東西に分かれ、久宝寺は西本願寺派となったため、慈願寺の分裂派も八尾へ移住して、慈願寺を建設した。八尾は長瀬川の水運にも恵まれたため、在郷町として発展し、久宝寺をしのぐ町となった。

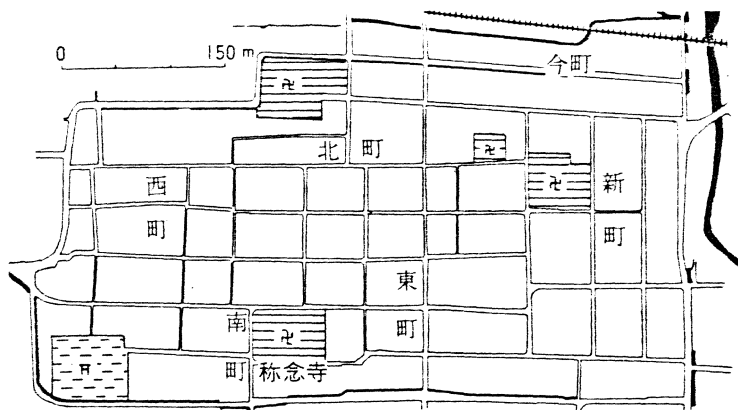
長瀬川の自然堤防の東に立地した八尾は、内部に整然とした方格状の道路が作られている。町絵図によれば、その範囲は菱形に近い方形をなし、周囲の濠・土塁によって区画されていない。

△和泉貝塚▽ 応仁年間蓮如によって布教が行われた。当初民家三六軒と庵寺一の小さな集落であったと伝える。以後根来寺の支

配下にあったが、天文一四（一五四四）年に右京坊（卜半斎了珍）を一向宗道場に迎えて、寺内町の建設が行なわれた。天正八（一五七七）年には、織田信長の根来攻めによって町は焼失するが、翌年商人の尽力によって再興され、秀吉・家康によって寺内町として公認された。願泉寺住職卜半氏は、寺内町の領主としての役割も果たし、町の支配・地子銭収納権ももっていた。



第7図 貝塚（貝塚市都市計画図による）



第8図 今井（橿原市都市計画図による）

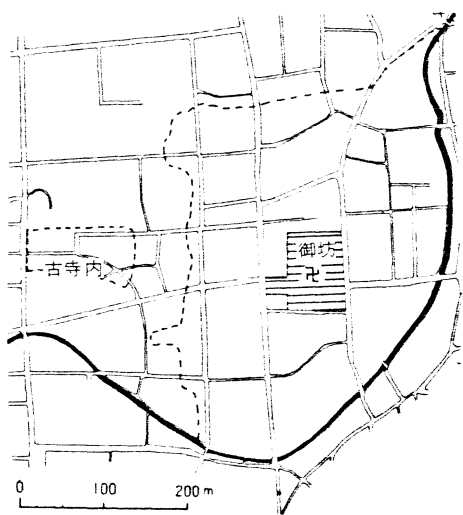
町の中央を南北に紀州街道（国道42号線）が走り、その両端を河川および濠によって区切り、周囲を濠・竹藪によって囲み防禦に備えている。内部の道路は絵図と異なって意外に不規則であり、願泉寺より東は特に不規則である。紀州街道より西は段丘崖下の低地にあたり、商家の多い地区であるが、西半分は比較的規則的な町割りが認められる。

△大和今井▽ 大和軍記によれば、天文二（一五三三）年今井兵部が、この地に向宗の道場を築き、地子免除等の特権を得て商人を集め、周囲に濠を築いて方四町の町割りを行なったと伝える。しかし、今井町史は、今井の環濠は、石山本願寺が信長に対抗して、門徒に武装ほり起を命じた元亀元（一五七〇）年あるいは天正元（一五七三）年頃に拡張・整備されたものと推定している。今井は天正三年信長に降伏し、以後秀吉によっても

寺内町の存続を許されて天正一一年に、本願寺より僧を招いて、称念寺が再興された。

今井は、周濠によって、ほぼ長方形をなし、内部は方格状の道路によって区画されている。詳細にみると、東・西・南・北の町と東に添加された今町・新町によって構成され、二種の道路割が認められる。西部の四町は、濠に沿った北端と南端の地区を除けば五本の道路によって四つに区切られ、南北に完全に結んでいる五本の道路によって東西も四つに区切られている。大和軍記の方四町はこの地区を指すと思われる。町の拡充あるいは再建を行なう過程で、新町今町を含み、それを囲む周濠が完成したと思われる。しかし周濠の完成期は天正一一年を下らない。

△紀伊御坊▽ 文祿四（一五九五）年浅野家の家臣によって、日高川河口の荒蕪地を寄進した。諸役免除の地であったため、周辺よ



第9図 御坊（御坊市都市計画図による）

り商人が集まり、寺内町とした。

方格状の道路割は認められないが、南北に直線状の道路があって、不十分な都市計画で終わったことを思わせる。

二、寺内町の形態的特色

①建設期 真宗本願寺派の蓮如によって建設され、その継承者達によって発達した寺内町は、北陸・畿内を中心に建設された。寺内町の整備は、寺院の建立と異なって明確な資料を欠くことが多く、正確な建設時期は明らかにしえないものが多い。

前節で述べた寺内町の建設期及び再建期を一覧表にすると、次のことが明らかとなる。寺内町は一五世紀後半より建設され始める。

第二の建設時期は、山科が焼失して、石山へ本願寺の移転した一五三〇年代にみられる。第三の建設時期は石山本願寺が、信長の力に降伏して、大阪の地を去る一五八〇年代にみられる。その前後は、同時に、第二期に作られた各地の寺内町が、戦国大名の力に敗れて破壊され、その再建に当たった時期でもある。従って、一三九一年に作られたと伝える井波は、一六世紀後半に建設されたと見做すのが適切と思われる。遅れて造営された寺内町に御坊・八尾が挙げられる。秀吉に敷地を与えられた摂津天満（一五八六）、京都の西本願寺（一五九一）、東本願寺（一六〇二）は、城下町大阪あるいは京都の繁栄策としておかれ、独自の寺内町とは既に言えない。

最も早く建設された近世的な城下町の代表的なものを挙げれば、長浜城（一五七四）、安土城（一五七六）、姫路城（一五八〇）、大阪城（一五八三）、近江八幡城（一五八五）、江戸城（一五九〇）、

京都の改造・御土居建設（一五九〇）、伏見城（一五九三）がある。一六世紀の後半から一七世紀の前半にかけて、国内の統一と共に建設され、その規模も寺内町と比較にならぬ程大きなものとなっている。近世城下町は、城郭・侍屋敷・町屋・寺町より構成され、それは、中世の城館・市場・門前町が集約されて完成した町と考えれば寺内町はその宗教的機能の面で、城下町に先行している。寺内町は商工業者が多く集住しており、経済的を要素でも先行していると言えよう。ここでは、機能的な面ではなく、都市の形態において、両者に関連があるかを検討するのが目的である。

② 道路区画 寺内町の形態的特質として、方格状の道路がまず挙げられる。前掲の都市計画図と、近世に作成された古地図・地名によって、町の範囲を比定し、その内部の道路の形を検討した。道路が並行し、かつ直交している町は、第1表にみる如く意外に少なく、完全に存在する町は四例のみである。町の中心部あるいは一部のみの方格状の道路が存在している町も五例あり、全く認められない町も四例ある。町割の認められない山科の場合、二の丸に当る鐘紡山科工場跡地の発掘調査においても、明確な道路跡は認められていない。

城端を例外として、北陸には方格状の道路割は作られず、方形・周濠の方格状の道路を伴う町は、畿内に限定される。山科本願寺が焼失した後に、典型的な寺内町は、形態的に整ったと思われる。各寺内町に認められる道路間隔を、都市計画図によって計測してみると（道路の中心点間の距離）、第2表の如く、多様な間尺がある。形の整っている久宝寺は、東西幅が、二九間とその倍数で統一される。

第1表 寺内町の建設期及びプラン

寺内町	② 建設期				⑥ 方格状の道路	⑦ 寺院の割合
	15世紀	16世紀前半	16世紀後半	17世紀		
井端			→x1581		無	27.1%
城府			1571○→1582		中心部のみ	
古崎			1584○		無	(18.1)
山田	1471○→x1479		→1583○		無	
山科	1478○	→x1532			／	(18.1)
富田	→1475○	1532x○1536			ごく一部有	
石山	1496○	→○1532	→x1580		／	9.6
久宝寺	1475○	→○1532	→x1577○		有	
富林			1558○		有	5.6
大塚			→1568○		中心部のみ	11.1
八尾				1606○	有	12.5
貝塚	1468○	→1544○	→x1577○1580		一部有	11.3
今井		1533○	→○1570		有	6.5
御坊			1583		有	
			1595○		一部有	4.2

○真宗寺院の建設 ◎寺内町の建設 ×消失・破壊
 —— 寺内町の継続 —— 寺内町が不明なもの

第2表 方格状道路の間隔

			南 北 幅			東 西 幅					
久富八今城大貝御	宝田寺林尾井ヶ塚塚坊	寺林尾井ヶ塚塚坊	18間, 22.2間, 25間, 26.7間, 27.8間, 30.6間	29.4間・2, 48.9間・3	22間, 39間・2, 44.4間・2, (30.6間)	29間・2, 45.6間, 53間, (30間)	25間, 31間・2, 39間, 44.4間, 53.2間, (25.5間) (33.3間)	26間, 69.4間, 80.6間	27.8間・3, 33.3間, (25間)	27.8間・3, 50間・1	42間, 47間, 55.6間
			20間, 22間・6	29間・2, 45.6間, 53間, (30間)	25間, 31間・2, 39間, 44.4間, 53.2間, (25.5間) (33.3間)	26間, 69.4間, 80.6間	27.8間・3, 33.3間, (25間)	27.8間・3, 50間・1	42間, 47間, 55.6間		
			30間・5, 39間・2, (32間) (39間)	29間・2, 45.6間, 53間, (30間)	25間, 31間・2, 39間, 44.4間, 53.2間, (25.5間) (33.3間)	26間, 69.4間, 80.6間	27.8間・3, 33.3間, (25間)	27.8間・3, 50間・1	42間, 47間, 55.6間		
			24.3間 - 3 (36間・2) (50間)	29間・2, 45.6間, 53間, (30間)	25間, 31間・2, 39間, 44.4間, 53.2間, (25.5間) (33.3間)	26間, 69.4間, 80.6間	27.8間・3, 33.3間, (25間)	27.8間・3, 50間・1	42間, 47間, 55.6間		
			14.4間, 27.8間, 39間	29間・2, 45.6間, 53間, (30間)	25間, 31間・2, 39間, 44.4間, 53.2間, (25.5間) (33.3間)	26間, 69.4間, 80.6間	27.8間・3, 33.3間, (25間)	27.8間・3, 50間・1	42間, 47間, 55.6間		

() は部分的、後に添加された道路

ているが、南北幅は全て異なった間隔となり、富田林も南北幅は、二二間で一定しているが、東西幅は三種類がある。八尾・今井も、道路間隔はさらに多様となっている。町の一部分に認められる他の寺内町も、多様な道路間隔を採っている。

その道路間隔に共通しているものを探すと、二二間及びその倍数の三例、二五間及びその倍数が三例、二八間及びその倍数が四例認められる。全ての寺内町に共通な道路間隔は存在しないが、相互に共有している道路間隔のあることが知られる。

③ 寺院と町の関係 寺内町内部における真宗寺院の役割を知る手がかりとして、寺院の敷地とが寺内町に占める割合をみると、大きな差異があることが知られる。最も大きな比率を占めるのは、町の1/4を占めている城端であり、最も小さいものは御坊の四角である

第3表 寺内町の類型

類 型	事 例
①町割りが存在せず	門前町型 井波, 古府
	豪族屋敷型 吉崎, 山科
②基盤目型	規則的 久宝寺, 富田林, 八尾, 今井
	不規則または一部 城端, 富田, 大ヶ塚, 貝塚, 御坊

(第1表0参照)。一割前後を占める町が、大ヶ塚・八尾・貝塚であり、五割前後を占める町も多い。富田林の興正寺の場合、その敷地は、町建設の担い手であった八人衆の一人、杉山氏の敷地と同面積であり、町内部における比重がいかにか下がっているか知られる。参考にあげた山科は、本丸の西半分のみであり、内寺内と称される本丸の東半分を含めれば、近く達している。

町の経営は、住民の自治がかなり認められ、町の建設に力を尽した有力者が、その中心となっている。久宝寺では安井氏、今井では今井氏、富田林では八人衆、八尾では一七人衆、貝塚では三六人衆と呼ばれている。

結びにかえて

町の形態からみれば、寺内町は方格状の町割りの存在しないものと、基盤目型の町割りの認められる町と二つに分類される。前者には、寺の門前町の形態を採ったものと、豪・土屋によって防禦を中心に考えられた吉崎・山科がある。後者は、山科本願寺が焼失して本願寺が石山へ移転して以後建設されている。城端・御坊を例外として、全て畿内に限定されており、各々地方の中心的商工業都市として発展している。従って、環濠・方形・方格状の道路割の寺内町は、一五三〇年代以降の建設で、前者とは同列と考えられない。

後者の寺内町は、その形態を環濠集落を範として作られたと推定されているが、内部の道路の形態は、迷路状と、碁盤目状と大きく異なっている。農業集落を濠で囲んだ環濠集落と、商工業者の居住する寺内町は機能的にも異なっている。中世末迄に各地に発生した市場町を、一定の地域に計画的に配置したものが、寺内町の都市計画といえる。

碁盤目状の都市計画は、当時の日本においては京都・奈良にのみ見られるものであり、とりわけ京都は「洛中洛外図」によって各地で注目を集めている。従って京都の碁盤目型土地割が直接各地の寺内町のプランとなつたのか、堺・平野郷の自由都市のプランとして、商人達によつて寺内町へ広められたのか、今後の課題としたい。

また近世城下町のプランとの関係は、城下町の町屋地区についてのみ、共通な特質が認められよう。近江八幡・大阪天満などへ吸収された真宗寺院は、方格地割をもつ町屋の一部として組みこまれてゐる。城下町全体としては、より多様な要素を吸収したものである。

注

(1) 藤岡謙二郎「寺内町の性格」人文地理一 号 昭和二二年

(2) 牧野信之助「中世末における寺内町の発達」史学雑誌四一巻一〇号 昭和五年

(3) 前掲注(1)

(4) 脇田修「寺内町の構造と展開」史林四一巻一 号、昭和三三年

(5) 中部よし子「近世都市の成立と構造」一七五〜二二一頁、新生社

昭和四二年

(6) 西川幸治『日本都市史研究』七一〜一六五頁、日本放送出版会 昭和四七年

(7) 前掲注(5) 一八〇頁

(8) 井波絵図、宝暦一年(一七六一)、井波町立図書館蔵

(9) 前掲注(6) 一四二頁

(10) 城端絵図 享保一年(一七二六)、城端町立図書館蔵

(11) 坂井誠一「城端絵図解説」、西川・原田編『日本の市街古図・東日本編』所収、講談社、昭和四八年

(12) 前掲注(6) 八三〜九〇頁

(13) 『福井県史蹟勝地調査報告書』第2冊 大正九年

(14) 前掲注(5) 一八四〜一六頁

(15) 井口尚輔「中世城郭伽藍」山科本願寺』『日本歴史』二六五号 昭和四五年

(16) 前掲注(5) 一八一〜二頁

(17) 前掲注(6) 一一三〜一四〇頁

(18) 沢井浩三「寺内町の形成とその性格——久宝寺と八尾」藤岡謙二郎編『畿内歴史地理研究』所収、日本科学社 昭和三三年

(19) 前掲注(4)

(20) 野村豊「大雅塚由来記」『河内石川村学術調査報告』所収、昭和二五年

(21) 前掲注(8)

(22) 『貝塚市史』第一巻 昭和三〇年

(23) 貝塚町絵図・慶安元年(一六四八)、願泉寺蔵

(24) 『今井町史』 昭和三二年

(25) 『紀伊続風土記』 第二巻

(26) 鳥羽正雄「中世末期の關東における都市の発生」都市地理研究 所収、昭和四年